『地域政策研究』（高崎経済大学地域政策学会） 第７巻　第４号　2005 年３月　３頁～ 11 頁

岡部栄信の思想と行動

―岡部温故館の整備・充実を目指して―

702-003　岡部保信　指導教官　和泉清司

A　Study on the Thought and Action of Eisin Okabe

― With the Aim of Replenishing and Improving the Okabe Onkokan Museum ―

Yasunobu OKABE

はじめに

現代の多くの人は、「岡部栄信ってどんな人？」と知らない人が多い。また、『群馬県人名辞典』等にも掲載されておらず、『甘楽富岡農業協同組合百年史』の甘楽社関連箇所や『上信電鉄百年史』などにも歴代の役員の任期一覧までで、どんな活動をした人物なのか具体的な事は全く述べられていない。いくらか知っている人でも、役職としては丹生村村長や群馬県公安委員を務め、大正時代に丹生電気株式会社を中心になり設立し農村開発を行い、戦後は石門心学の著書などを著し、没後は富岡の大塩湖の「いしぶみの丘」に「得意淡然、失意泰然」という直筆の座右の銘が残されているというくらいの知識であると思う。しかし、実際には栄信の生き方には、思想的には石門心学ばかりではなく儒教や報徳思想などの考え方も十分入っていて、行動面でも単に丹生村長や県の公安委員などといったことだけではなく、生前は様々な役職を引受け活動し、幅広い足跡を残していた。本稿では、岡部栄信は儒教や報徳思想を心の拠り所として、明治末から大正時代、昭和前期を生きたのではないだろうかという仮説を立て、この視点から論考を進めて行く。そして、最終的には富岡市立岡部温故館の中心資料である岡部栄信の思想と行動を、群馬県の近代現代史の中でしっかりと位置づけ、富岡市立になっている岡部温故館をより充実整備してもらい、この館を富岡のまちづくり、地域づくりの一つの核にして戴きたいということを研究目的とする。

Ⅰ　岡部家と岡部栄信について

（1）岡部家の紹介

岡部家は、安政年間（1850 年代）から明治初期、北甘楽産の麻、南牧村砥沢の砥石を商い、倉賀野河岸から江戸へ送り、江戸の問屋を始め三河、尾張、伊勢地方迄の販売網を持つ、西上州を代表する在郷商人であった。栄信の祖父爲作の代には、生産会社（金融会社、製糸会社を経営し、金融活動を通じて土地集積を進めた。田畑所有高は、幕末の元治２年（1865）４町歩余から明治 40 年代には 100 町歩を超える地主に成長し、以後、地主経営を維持拡大して、〔表１〕のように大正期には大正 13 年６月農商務省農務局『50 町以上の大地主』より碓氷郡松井田町の吉田直太郎に次ぐ群馬県内第２位の田畑の所有面積であり、〔表 2〕から岡部家資料より小作人約 500 人近くおり、小作米 1600 ～ 1700 俵、小作金１万 2000 ～ １万 3000 円が秋には岡部家に納められる状況で、昭和 20 年代の農地解放時点には、田畑約 130 町歩を有する県内屈指の大地主であった。

〔表１〕　大正期の県内の百町歩地主

氏名	住所	所有耕地反別			小作人の戸数
		田	畑	計	
吉田直太郎	碓氷郡松井田町	３７町６反	１１９町９反	１５７町６反	３８７戸
本間千代吉	佐波郡赤掘村	７４．７	５５．９	１３０．６	４３５戸
千金楽喜一郎	邑楽郡館林町	５９．７	４８．４	１０８．１	４００戸
桜井伊兵衛	高崎市本町	７９．５	２３．６	１０３．１	３２８戸
半田善四郎	碓氷郡原市町	３９．１	６２．６	１０１．７	４５０戸
橋田銀四郎	邑楽郡館林町	５８．７	４１．５	１００．２	３５０戸
岡部爲作	北甘楽郡丹生村	３５．８	４２．３	７８．１	１２５戸
岡部栄信	同　上	１７．５	３６．０	５３．５	９６戸
岡部家合計		**５３．３**	**７８．３**	**１３１．６**	**２２１戸**

出典　大正 13 年６月農商務省農務局『五十町歩以上の大地主』,『群馬事件の構造』236 頁

〔表２〕　岡部家の地主経営の規模

年度	小作人（指数）	小作金（指数）	小作米（指数）
大正元年（1912）	328（100）人	4,033（100）円	1,154（100）俵
大正７年（1918）	473（144）人	8,892（220）円	1,716（149）俵
大正８年（1919）	482（147）人	13,051（324）円	1,744（151）俵
大正 14 年（1925）	477（145）人	12,758（316）円	1,766（153）俵

出典　『群馬事件の構造』247 頁より

（2）岡部栄信について

岡部栄信は、明治 19 年（1886）5 月 31 日群馬県北甘楽郡丹生村（現在の群馬県富岡市丹生地区）に生まれ、数え 6 歳にして父を、数え 9 歳にして母を亡くして、祖父爲作、祖母なつにより育てられた。旧制富岡中学校を卒業後明治 38 年 4 月より東京の早稲田大学法学科予科で 1 年間だけ学んだが、祖父爲作の希望により中途退学して帰郷した。同 39 年 6 月の北甘楽郡西牧村本宿（現在の甘楽郡下仁田町本宿）の神戸篤太郎の長女でいとこの神戸きんと結婚し、子供は、男 1 人・女 7 人いた。栄信は、日露戦争後の明治末期より群馬県北甘楽郡を中心に活動を始めた。その活動は、阿呆駄羅経などにより多数の著書を作り、小作人や青年達に配り大衆教化を行った。また、大正時代は、地元丹生村では丹生電気株式会社を 12 人の株主を募集し設立し、自ら社長になって農村開発を行った。社会的役職では、群馬県農工銀行監査役・上信電気鉄道株式会社取締役・組合製糸甘楽社副社長・甘楽銀行取締役に就任した。そして、昭和に入ると北甘楽郡農会長・同郡教育会長・群馬大同銀行取締役・同郡丹生村長・同郡連合青年団長などを務めた。第 2 次世界大戦後は農地解放により台帳面積で 130 町歩を超える田畑を失った。公職としては、社団法人石門心学会群馬県支部長、伊勢神宮奉賛会顧問や群馬県公安委員を務め、昭和 37 年（1962）には、富岡市一ノ宮の貫前神社の外苑に約 2,500 人からの浄財で「頌徳碑」が建てられ、昭和 40 年（1965）8 月 12 日数え 80 歳で生涯を終えた。

II　栄信の著作と老農船津伝次平―阿呆駄羅経による社会教化―

岡部栄信（1886 ～ 1965）は、大正初期より多くの阿呆駄羅経による著作を残している。これは、北甘楽郡の農村の青年達や地主として約 500 人近くいた自分の小作人達を対象に書いたものである。大正 6 年発行の「通俗 アホダラ笑訓」のはしがきにて、栄信は、「適々（たまたま）老農船津伝次平翁の伝を読み翁の為人（ひととなり）を敬慕すると同時に翁が稲作養蚕の改良並に芋作の方法等を極めて軽妙なる通俗阿呆駄羅経にて示されたるを拝見し『ナル程これでなくては』と痛く感服して仕舞ひ申候　ソコデ翁にあやかりて、なるべく通俗平易にして誰が読んでも面白可笑しく、そして少しはためになる様なものをと（後略）」と書き残し、自分の著作は、日本三老農の一人群馬県勢多郡富士見村出身の船津伝次平の阿呆駄羅経による著作にヒントを得たものであるとしている。そして、栄信は老農伝次平の阿呆駄羅経ばかりでなく源流に報徳思想等があるといわれる伝次平の老農精神、つまり天道・人道の「性を率（ひき）いるの思想」を尊敬し見習おうとしていた。

III　農工銀行役員辞任劇の真相－気丈な妻きん―

岡部栄信は、大正 8 年（1919）7 月 25 日に群馬県農工銀行の監査役に、大株主である群馬県の知事大芝惣吉の指名にて弱冠数え 34 歳にて就任して、昭和恐慌（昭和 5 年～ 7 年）の直前の昭

和４年（1929）６月末頃まで三度再任され役員を務めた。期間としては、約 11 年間北甘楽郡の代表としての役員であった。そして、栄信は、大正８年から約 10 年務めた役員を最終的には、昭和５年 12 月１日に日本勧業銀行と合併する１年余り前に、多量の不良貸付があり、経営が悪化している同銀行の頭取候補に擬せられ、妻きんの力も借り役員を辞任し自己の財産を保全した。この時の斎藤義太郎の後の農工銀行の頭取は、本間千代吉であった。本間は、佐波郡赤堀村に住み、栄信と同じ 130 町歩ほどの田畑を所有して大地主であり、群馬県を代表する多額納税者である。この本間は、２代目千代吉であり〈明治 21 年（1888）～昭和 34 年（1959)〉、岡部栄信が明治 19 年〈(188 7）～昭和 40 年（1965)〉であるからほとんど同じ時代を生きた２人である。群馬県農工銀行では、大正 14 年と昭和３年の株主総会においてお互いに役員に選任され、本間が取締役、栄信が監査役と役員仲間でもあった。では２人はどこが違ったのだろうか。それは、本間は、貴族院議員になり政界に出たが、それに反して栄信は、政治の世界を嫌い政界には一切飛び出さなかったのである。これが２人の決定的に違うところであろう。栄信は県会にも貴族院にも衆議院にも出なかったのである。それが、彼の処世哲学の１つであった。そして、自分は先祖から受け継いだ財産があってはじめて社会的に活動ができるのだという事も十分自覚していたのだ。

Ⅳ　組合製糸甘楽社の副社長時代

幕末以来、日本の最大の輸出品であった生糸の製造販売を担った群馬県の組合製糸の１つ「甘楽社」と大正時代の岡部栄信の関わりについて論考し、彼の思想と行動を見く。栄信は、大正６年（1917）４月から３年間甘楽社本社の監事、同９年４月から４年間甘楽社６代目社長森平喜十郎の下で副社長を務めている。栄信は、甘楽社副社長時代行ったこととして、①原料受付制の普及のため阿呆駄羅経の本『通俗製糸の改良ばなし』の頒布、②本社各組の役職員の人名録『甘楽社人名録』の頒布、③南三社合併の推進を主張－栄信編著『米国絹業団と日本の生糸並に三社合併問題』。以上３つが栄信の甘楽社時代の著書編著から考えられる。それ以外に、岡部家資料より見てみると栄信は、甘楽社副社長時代を通して筆が立つため、森平社長の代わり主になり陳情書や各種組への報告書の原稿書き、そして、群馬県農工銀行監査役や甘楽銀行支配人（大正８年５月就任）の役職を利用し甘楽社の運転資金の借入れのため、群馬県庁や各銀行へパイプ役も果していたと思われる。しかし、栄信は、大正 13 年４月次期社長と目されていながら「家事上の都合により」という表向きの理由にて同社の副社長を辞任してしまう。これは、栄信が甘楽社の副社長に就任した大正９年も第１次世界大戦後の経済恐慌で甘楽社も打撃を受けるが、それに比較できないほど関東大震災の被害は甘楽社には深刻だった。大正９年の恐慌時は 1,754 円の損失であったが、関東大震災が起きた同 12 年は 108,479 円の損失で 62 倍近い桁違いの損害を受けた。この時はまだ祖父爲作が現職で生きており、その指示があったと考えられる。また、農工銀行の役員辞任劇と同じく自己の財産を保全してはじめて人に施すことが出来るという彼の処世哲学から来たものであろう。栄信は、

繭価、糸価が乱高下する製糸業に参画して自己の財産を失う不安を感じ、関東大震災を契機に甘楽社の経営から身を引いたのである。

V　上信電鉄電化実現への序幕

〔表３〕　電化前後の上野鉄道（上信電気鉄道）の旅客貨物取扱状況

年次	旅客		手小荷物		貨物		賃金合計（円）
	人員（人）	運賃（円）	数（斤）	運賃（円）	数量（トン）	運賃（円）	
大正 10 年前	217,319	78,955.02	72,577	1,736.36	23,893	35,060.99	115,752.37
同年後	298,026	92,039.64	123,509	3,169.35	33,305	38,603.50	133,812.49
大正 11 年前	271,221	86,125.33	181,663	3,022.55	32,522	38,048.32	127,196.20
同年後	298,163	90,607.43	285,766	4,504.93	33,460	39,838.38	134,950.74
大正 12 年前	304,890	94,677.33	203,577	3,331.52	36,123	38,489.65	136,498.50
同年後	345,976	108,456.51	359,366	5,304.91	45,324	46,821.65	160,583.07
大正 13 年前	313,327	97,672.84	295,092	4,658.21	51,159	46,212.66	148,543.71
同年後	376,667	139,701.67	653,224	8,237.89	47,172	77,910.91	225,850.47
大正 14 年前	349,075	133,185.73	727,040	7,805.63	34,532	66,291.22	207,282.58
同年後	400,157	147,501.40	806,396	8,672.53	35,821	69,116.54	225,290.47
大正 15 年前	359,987	125,700.35	691,729	7,508.66	32,828	64,081.10	197,290.11
同年後	371,641	126,544.13	784,799	7,740.89	32,160	63,338.65	197,623.67
昭和 2 年前	339,702	117,442.56	591,856	6,789.90	31,728	61,267.97	185,500.43
同年後	**391,463**	**127,478.73**	**644,966**	**7,449.91**	**33,690**	**69,138.42**	**204,067.06**

出典 上信電鉄（株）資料より作成。（前期 4 月 1 日から 9 月 30 日迄、後期 10 月 1 日から 3 月 31 日迄）

岡部栄信は、大正９年（1920）４月に高崎―下仁田間を走る軽便鉄道の上野（こうずけ）鉄道株式会社の取締役に就任する。そして、短期間であったが同 14 年（1925）９月までの約５年半取締役として在任した。上信電鉄は、大正 13 年に電化された。栄信は、その時どういう行動をとったのであろうか。それは、昭和 14 年 10 月 1 日発行の栄信の著書『漫文　奥利根めぐり』の中で若い時の思い出話として確認される。

> ソコデ時節は到来した、即ち　高崎水電が東電と合併して　高崎の人達は金の洪水でこれを如何なる方面に振り向くべきかといふ絶好のチャンスが来た。私は大久保氏と耳打して　電光石火の活動を開始した。（中略）北甘百年の大計は　狭軌を広軌に改造することだ　（中略）大久保氏を促して、高崎に乗り出し、忘れもせぬが、八島町駅前の武蔵屋旅館に陣取り画策を始めたのである。（中略）武蔵屋へ引揚げて見ると、井上、桜井、佐藤三氏も揃つて待つて居られた。ソコデ北甘開発の重大会議の口火はついた、これが抑も（そもそ）電化運動の序幕なのであつた、その後高崎の世論はまとまり北甘と協力して大事業は完成するに至つたのである、私も宿望貫徹して実にうれしかつたのであつた。（以下省略）

上記のように現在では裏面史になりあまり知られていないが、栄信は、原富岡製糸所所長大久保

佐一とともに当時の上野鉄道の電化に関して相当奔走したようだ。〔表３〕より大正 13 年の電化される前と後では、旅客貨物の取扱状況は相当な変化が見える。例えば、旅客について大正 10 年前期と昭和２年後期では利用人員で２倍近い増加であり、運賃収入も約 48,500 円以上の増収である。手荷物と貨物に関して同時期を比較すると、手荷物は数量で約９倍近い増加、運賃収入で約 5,700 円の増収、貨物に関しては数量で約 9,700 トン以上増加、運賃収入で約 34,000 円の増収である。運賃合計を見ると大正 10 年前期約 115,000 円、昭和２年後期が約 204,000 円であり約 88,000 円の増収である。この様に取扱状況に関しては大変な変化が起きている。また、この時は、単なる電化だけではなくレールが拡幅されたので、上信電気鉄道と国鉄のレールがつながり、貨車の相互乗り入れが実現した。この時から高崎駅構内に上信の駅が組み込まれ、時間短縮と輸送力アップが実現し、上信沿線の人々の日常生活に大変な恩恵がもたらされた。勿論山田昌吉は、上信電化の表舞台での大功労者であるが、この影には、今では知られていない大正 13 年前後の岡部栄信と大久保佐一たちの本稿のような上信電鉄電化実現の序幕への行動があったのである。

Ⅵ　金原明善の揮毫作品を巡って―大日本報徳社訓導大木随處の交流を通して―

岡部栄信は、静岡県の社会事業家の金原明善を尊敬していた。群馬県富岡市上丹生の岡部温故館並びに岡部家には岡部栄信が入手した金原明善の揮毫作品５点がある。いずれも栄信の求めに応じて書かれたものである。栄信が、明善に揮毫を依頼するに当たって、実は、斡旋者が存在した。その人物は、報徳思想を各地に広めた大日本報徳社訓導大木随處である。栄信は、この大木随處を通じて金原明善の揮毫作品を入手していたのである。そして、栄信は、明善の公益を起す精神を敬慕していた。この明善の処世哲学は儒教に基づいていた。岡部温故館所蔵の「信為万事本」為岡部栄信君請嘱という金原明善の揮毫作品のことばがある。明善記念館の主事を約 20 年間勤めた鈴木要太郎氏は、著書『金原明善翁余話』（社団法人浜松史跡調査顕彰会、昭和 56 年、66 ～ 67 頁）で次の様にこの言葉を説明している。見てみよう。

> だから、信の字の人扁が次第に短くなっていく。人の言は信であるべき筈だ。が、人扁が言の字より長い人を嘱（たの）む、かくてこそ社会に信用を得、世に重んぜられる人となる、古人も「信は万事の本をなす」とおしえている。

栄信の大正５年（1916）の著作「大正お金の生る木」の源流がここにあるようだ。この「信」は、明善の思想の中核を形成し、彼の精神を支えたといわれる儒教の人の常に守るべき道「五常」の仁・義・礼・智・信の「信」である。明善の絶筆と言われる「私心一絶万功成」も、一刀両断バッサリと私心を捨てて他人に対処する事を言っている、正直でなければいけないし、人から信用を受けなければ事業経営はうまくいかない。私利私欲を完全に捨て、忍耐・勤勉・慈悲の心を持てと言っている。この「信」は、栄信も一番大切に思い栄信自身の名前に使われてもいるが、栄信以降、岡部家代々の通字（とおりじ）にもなっている。岡部栄信の思想は、報徳思想や石門心学が勿論考えられる訳である

が、思想の根底には、明善と同じく儒教を考えてよいと思う。なぜなら、彼の著書のあちらこちらに論語・中庸・大学等見て取ることができる。栄信の公益への実践として、〔資料１〕のように昭和３年５月に栄信は県道改修費金１万円を寄付して、同年９月に紺綬褒章を下賜された。この現金の群馬県への寄付は、当時の道路工事人夫の１日の賃金が約 30 銭という時代、現在の貨幣価値に直せば約３億円に匹敵する金額であった。これは、金原明善に啓発された公共のため地主としての収益を地域社会に投じ、道路を改良することで地域振興をなし公益を起す精神の一つの実践と見ていいのではあるまいか。

〔資料１〕

日本帝国褒章之記

群馬県北甘楽郡丹生村

岡　部　栄　信

昭和三年五月群馬県北甘楽郡丹生

村地内県道改修費金一万円寄附ス

依テ大正七年九月十九日

勅定ノ紺綬褒章ヲ賜ヒ以テ之ヲ表彰セラル

昭和三年九月二十四日

大日本

帝国賞

勲局印

賞勲局総裁従四位勲二等　天岡直嘉　印

此証ヲ勘査シ第千七百一号ヲ

以テ褒章簿冊ニ登記ス

賞勲局書記官　従　五　位　伊手衡　印

Ⅶ　農業教育家山崎延吉の薫陶　―「弥生の道」からの考察―

本章では、栄信と『弥栄の道』の著者で愛知県安城市の農政家・農業教育家の山崎延吉との関わりについて論考する。昭和５年（1930）６月発行の栄信の銀婚記念の山崎延吉執筆の『弥栄の道』の第４章「家庭の円満は人生の幸福」を見てみよう。

家族が勤倹力行して、余財を積むで万一に備ふるは、国民が勤倹力行して、経済を順調にし我国力の充実をはかると同様である。上位の人、よく貧しき人や弱き人や、恵まれぬ人の為めに、心をいたし、財を惜しむことなく、公共、公益の為めに力をいたせば、和偕の民風は必ず生じ、人々の平和の天地を迎ふることが出来るのである。

上記は、山崎の報徳思想が出ている。つまり、公共・公益への「推譲」行為を求めている。山崎

は、報徳社の名誉訓導を務めたれっきとした報徳主義者であった。栄信への山崎のメッセージの実践として、北甘楽郡丹生村村長時代（昭和９年７月から昭和 21 年 11 月まで在任）の旧丹生村中山地区の栄井戸の掘削事業がある。〔資料２〕は、栄信が昭和 15 年（1940）６月 10 日竣工させた栄井戸の記念碑文である。

〔資料２〕

皇紀二千六百年ノ春、古今未曾有ノ大旱魃ニテ村人ノ飲用水無ク困却其ノ極ニ達ス、此ノ時村長岡部栄信殿深ク御心ヲ悩サレ、（中略）、着工考慮セシ処村長殿曰ク、水ハ米ト同ジ一日モ欠ベカラザル生命ノ綱ナリ、猶旱天続カバ如何セント指示セラレ一層村民ヲ励シタリ、此ノ親心ニ吾等村民感謝感激セザルモノナカリキ、善ハ急ゲノ諺ニテ直ニ着手シタリ、幸ニシテ水口ニ当タリ大量ノ清水湧出セリ、此ノ時村民歓声ヲ挙ゲテ喜ビタリ　此レ即チ村長殿常ニ村民ヲ愛スル偉大ノ精神天ニ通ジタルヤ神ノ導キトナリタルモノト信ズ、四月二十四日ニ着手シ六月十日完成ス　人工三百人ヲ要シ巨額の費用全部岡部栄信殿寄贈セラレタリ（以下省略）

栄信は、旱魃で苦しむ中山地区の人達の為に、奔走し労苦を惜しまなかったのである。「水は、米と同じく一日も欠くべからざる命の綱だ」と述べて、人工 300 人分の費用を全部村長１人で出したと記されている。これが前述の『弥栄の道』で山崎の言っている「上位の人、よく貧しき人や弱き人や、恵まれぬ人の為めに、心をいたし、財を惜しむことなく、公共、公益の為めに力をいたせば、和偕の民風は必ず生じ、人々の平和の天地を迎ふることが出来るのである」ということに正に当たる。栄信は、山崎から「地主者の心得」という薫陶を受けたと考えられる。つまり、地主としての収益を地域社会に還元すること、また、丹生村長や北甘楽郡連合青年団長などの役職を引き受け公共・公益のために尽くし、「村格」向上させて品格ある村、見識ある村を作っていく事、そして、農村自治における農村青年・女子青年の社会教育の必要性・重要さを教わったのではないだろうか。

おわりに

（１）論文のまとめ

今回、岡部栄信の思想と行動のパートⅠとして取り組んだが、栄信の「思想」に影響を与えたものとして、源流に二宮尊徳等の思想がある船津伝次平の老農精神、社会事業家で公益を起す金原明善の儒教的精神、農業教育家で報徳思想家の山崎延吉の「地主者の心得」の薫陶を考える事ができる。また、今回取り上げた大正時代から昭和前期の「行動」的なものとして群馬県農工銀行の監査役、組合製糸甘楽社での副社長、上信電鉄の取締役としての行動の３つである。本論で論じてきたように栄信の思想と行動は、主に儒教と報徳思想に基づくものであった。しかし、栄信は、思想家ではなく飽く迄も青年や小作人の社会教化を行い、自分の人生を生き抜く処世哲学として儒教と報徳思想を根底に据えていたと考えてよいのであり、その他に石門心学、仏教思想、神道、陽明学等

も研究し、よいと思うところは自分のものとしていたと解釈すべきである。その証拠に、石門心学として第２次世界大戦後の社団法人石門心学会群馬県支部長就任や著書『通俗 心学すゝめ』の発刊があり、仏教思想では臨済宗の高僧間宮英宗との交流、日本神道では、伊勢神宮奉賛会顧問や貫前神社、妙義神社奉賛会会長、群馬県神社氏子総代会会長などの神社活動、陽明学では東洋思想家安岡正篤との交流が挙げられる。今回の筆者の論考により岡部栄信は、儒教と報徳思想を社会教化と自己の処世哲学の根底に据えて生活していたと言ってよいのではないだろうか。

（2）結びのことば

今回は、岡部栄信の生涯を便宜上４期に分け、第２期の日露戦争後より大正期と第３期の昭和前期をテーマにし、「岡部栄信の思想と行動」として論じてみた。そして、今回は、あえて先行研究の分野である丹生電気株式会社のことや岡部栄信と石門心学の関係は引用するに留め新たな研究対象から外した。つまり、今まで研究のなされていなかった未知の分野のものを対象とし挑戦したつもりである。しかし、岡部栄信についてはこれ以外にも研究対象とするものは多い。また、先行研究である「丹生電気株式会社」や「岡部栄信と石門心学」も近い将来前分野も含め私自身で改めて研究を試みるつもりである。以上より今回の研究は飽く迄も「岡部栄信の思想と行動パートⅠ」である。しかし、筆者の今回の栄信の研究が不十分ではあるがなされたことにより、些かでも岡部栄信の位置付けに貢献し、今後、群馬県教育委員会指定の博物館相当施設であり、岡部栄信記念館でもある富岡市立岡部温故館が富岡市や地元丹生地区の中で、旧甘楽社丹生組の赤レンガ倉庫などとともに地域おこし、町づくりのしっかりした１つの核になり、今まで以上に社会教育施設・文化施設として少しでも充実活用される事を祈って止まない。

主な参考文献・引用文献

小池善吉『近代農村の歴史社会学研究（上）』（時潮社、昭和 60 年）
岩根承成『群馬事件の構造』（上毛新聞社、2004 年）
飯岡秀夫「『老農』の行方―船津伝次平の思想と足跡」『群馬にみる人・自然・思想』（日本経済評論社、1995 年）
山崎益吉『経済倫理学叙説』（日本経済評論社、1997 年）
千葉貢「在野の啓蒙家・岡部栄信―「修己治人」「知行合一」の常民思想―」『近代群馬の民衆思想―経世済民の系譜―』（日本経済評論社、2004 年）
群馬県史編さん委員会『群馬県史通史編８　近代現代２産業経済』（群馬県、平成元年）
茂木志郎『甘楽富岡地区農業協同組合百年史』（甘楽富岡農業協同組合、昭和 55 年）
高崎市市史編さん委員会『高崎市史 通史編４近代現代』（高崎市、平成 16 年）
金原治山治水財団『金原明善』（金原治山治水財団、昭和 43 年）
静岡県勧善会百年史編纂委員会『静岡県勧善会百年史』（功文社、平成６年）
山崎延吉『山崎延吉全集（１）（６）』（山崎延吉全集刊行会、昭和 10 年）